

都道府県別賞一等

保険からの贈りもの

和歌山県 和歌山県立桐蔭中学校 三学年

新屋 舞夏

突然のことだった。三年前の冬、祖母の脳に悪性腫瘍が見つかり、同時に認知症も進行していることが分かった。祖母は病気の影響で身のまわりのほぼ全てのことができなくなつた。あんなにおしゃべりが好きだった祖母はまるで何も話せなくなつていた。そして私や家族のことを思い出せなくなつてしまった。いつも笑顔で迎えてくれていたはずの祖母が、別人のように一変し大きなショックを受けた。しかし、一度だけ「暑くなあい。」そう祖母が話しかけてくれたことがあつた。心配するような、気遣うようなそんな口調だ。たつたの五文字だけだけれど、あの温かくて優しい祖母が戻ってきたような気がして、思わず涙がこぼれそうになつた。

惜しくも祖母は二年の闘病期間を経て、あの世へと旅立つた。宣告されていたよりも数カ月長く生きたと後から聞かされたとき、私は驚いた。祖母と話せたあの日は、祖母が懸命に生きぬいた最後の数カ月の中だったからだ。時間が経つた今、この作文を書くことになつて思うのは、生命保険が祖母と話したあの瞬間を支えてくれたのではないかということだ。祖母は病が発覚してから、何度も大きな手術を受け、長い入院生活を送つた。しかしその費用は決して安く済むとは言えない。生命保険はそんな金銭的な面を支援してくれていた。保険があつたから受けられた手術、保険があつたからできた入院。保険のおかげで、経済的な理由で手術や入院を断念することなく、治療を施してもらうことができた。私は祖母が保険によって必要な治療をしつかりと受けられたからこそ最後に話すことができた、そう本気で思っている。

保険はお金の支援だけでなく、祖母とのかけがえのない思い出を届けてくれた。その背景には相互扶助という、助け合いの精神が大きく関係していると思う。一人では背負いきれない負担も、何十万人もの人が遠くから一緒に支えてくれる。今回の出来事を通してそういう保険の仕組みや人のあたたかさを知ることができた。

あと三年もすれば私は、自分の意思で保険に加入できるようになる。必要な保険を見極め不測の事態に備えられるよう、これからより保険について学んでいきたいと思う。そしてたくさんの人によって祖母や家族が助けてもらったように、今度は私が、困っている誰かを支えられるような、そんな大人になりたい。